

中国楽器の演奏を音楽学部または音楽専攻の 学科系を擁する大学の授業科目にいかに入すべきか

— 二胡を中心に —

増山賢治

(2001年9月28日受理)

How can the performance skill on Chinese musical instruments(especially on Er-hu)be adopted into the subjects in the universities that have the faculty or department of music ?

Kenji Masuyama

Nowadays, the performance skill on the Asian musical instruments is primarily taught in the universities that have the faculty or department of music in Japan. Among them, Indonesian Gamelan is the most popular, and Indian Sitar is in the secondary position, while Chinese musical instruments like Er-hu or Pipa are recently introduced. I have taught the Er-hu at the seminar in ethnomusicology for recent two years, and I found Er-hu is comparatively effective not only as a general guide to the world of Chinese traditional music, but in knowing its modernization. Students will understand a characteristic of Chinese music in practicing a various kind of tunes based on the different modal system, or with improvisational ornamentation. However, other Chinese musical instruments, especially stringed instruments are also worthwhile to be introduced. In the case of seminar in the university, it is more desirable for student to study music as a culture than to advance the performance skill, therefore, the instructor of Chinese musical instrument is required to have a musicological background.

Key Words: Er-hu, Chinese musical instrument, adoption

キーワード：二胡、中国楽器、導入

はじめに

本学教育学部の音楽文化教育学講座では平成12年度より、専門選択科目の民族音楽学演習において、中国の胡琴（いわゆる胡弓）の一種、二胡（アルフー）の演奏を取り入れている。他大学でも音大を中心に、授業科目に諸民族の楽器の演奏を導入しているところがあるが、インドネシアのガムランを筆頭としてインドや韓国の楽器が主流であり、中国楽器はやや遅れを取っている感がある。しかしながら、以前より楽器店や通信販売では中国楽器が取り扱われていること、そしてインターネット上においても質的レベルは別として、中国音楽に関する情報が少なくないこと、また筆者自身も地元、広島の人々から二胡に関する問い合わせ（広島における二胡教師の有無など）を受けた経験がある

こと、などから判断すると、一般においては、中国楽器（特に二胡）に対する関心度は一定の高さを示しているように思われる。そう考えると、当然、中国楽器の演奏も大学の音楽学部や教育学部などの音楽科の授業科目へ導入が検討されても不思議ではないはずだが、その前にそれがいかに導入されるべきか、いくつかの課題をクリアしておく必要があるだろう。そこで、本稿においては中国楽器、特に二胡を大学^(註1)の授業へ導入する際の諸問題について、筆者自身の教習経験にもとづく提言を試みたい。

I 大学における諸民族の楽器演奏導入の現状

現在、日本の大学の授業科目において、諸民族の楽器演奏がどのように導入されているか、まず中国以外

の楽器について概観してみよう。

周知のとおり最も普及しているのはガムランで、ジャワとバリの二様式を擁しているところもある。

宮城教育大学（教育学部）
東京芸術大学（音楽学部）
国立音楽大学
東京音楽大学
兵庫教育大学（教育学部）
筑紫女学園大学（文学部）
沖縄県立芸術大学（音楽学部）
ほか

ガムランに次ぐ普及度と思われるシタールは、東京芸術大学（担当：小俣シュスマ非常勤講師）のほか、高崎芸術短期大学（担当：プレマダーサ・ヘコダ非常勤講師）で取り入れられている。カヤグムはかつて、東京芸術大学で教えられていた（担当：池成子非常勤講師）が、現在は中断している。そして、今ではこれらの音楽の一般の教室や個人教授が都市部においては珍しくなくなったのも、それらの音楽が大学の授業で取り上げられたことが、ある程度作用しているのではないかと思われるが、中国音楽の場合は、筆者の知る限り、一般での普及の方が大学での教習（理論研究は除く）よりも先んじた感がある。

次に中国楽器となると、ガムランに比べれば数は少ないが、それでも高崎芸術短期大学と東京芸術大学がこれを取り入れている。前者では二胡の姜建華（客員教授）、琵琶の王偉華（客員助教授）が名を連ね、後者では琵琶が楊宝元（非常勤講師）によってカヤグムと入れ替わる形で教授されている。目下、中国楽器の中で大学の正式な授業科目に乗せられているのは二胡と琵琶だけのようなが、将来的にはその他の中国楽器も当然、その対象とされる可能性も考えられるので、以下その適性を検討してみよう。

まず、劇音楽、語り物といった声楽ジャンルは言語の壁と同時に、発声法も西洋のそれとは異なるものが要求されるので、全般に難しいことが予想される。そして、器楽についても、合奏は異種の複数の中国楽器を一度に一人の教師が指導する体制を必要とするため、即座に導入できるとは考えにくい。そうすると、独奏曲をもつ、あるいは主として独奏形式で行われる楽器ということになるが、現在ではほとんどの中国楽器が独奏曲をもつに至っているという現状に鑑み、やはり独奏楽器としての伝統性、独奏形式の完成度を重視し、無伴奏の独奏形式を主体あるいは基本とする楽器、すなわち、古琴、古筝、琵琶、揚琴、胡琴類といった弦

楽器を優先し、管楽器や打楽器を副次的とするのが順当な措置ではあるまいか。

古琴は儒教の音楽美学感を知る上では重要なジャンルで、日本でも江戸時代以来、その音楽（琴楽）に対する興味は特定の人々によって支えられてきた経緯があり^(註2)、現在でも少数ながら愛好者が存在する。とはいえ、それは大衆性に乏しく、演奏者個々に独自のリズム解釈を求める記譜体系を有するなど、中国音楽の中でも特殊な存在であるため、中国においても真にその伝統を継承している人材は極めて限られている。それゆえに、その導入に際しては、単にそれを嗜むレベルの中国人音楽家や日本人の「琴士」（古琴の演奏者）と称する人々を安易に教師として充当するよりは、時機を見て中国から優れた人材を招聘するのが良策であろう。いずれにせよ、琴楽には合奏や伴奏など他ジャンルへの拡がりを求めることには無理があり、その点については琵琶や古筝の方がむしろ有効なのである。

琵琶は日本のものと名称は同じであるが、ほぼ垂直に構える演奏姿勢、パチを使用しないこと、フレット数が多いなど様々な点で相違がある。トレモロを多用するなど演奏技術が比較的複雑であるという不安もあるが、古典としての独奏曲だけでなく、新曲もあり、江南糸竹をはじめ合奏にも関わりをもち、さらには語り物（弾詞など）の接触につながる可能性をも秘めている。

古筝は前二者に比して、技術的には学びやすい楽器といわれ、また日本の箏と構造上、演奏法上、大差がないので、その既習者には一層入りやすいというメリットが期待される。そして、日本の楽器の中では中高、大学の授業への導入という点で、箏がおそらく最も普及率が高く、既習者も多いと予想され、そうした点を考慮すると、古筝も二胡や琵琶とともに大学での教習が積極的に検討されても良いのではなかろうか。それから、その楽曲には古琴曲からアレンジされたものもあるので、そこから琴楽への関心が開かれることも期待できるし、また語り物にも用いられており、それらのジャンルへの開眼も考えられる。

揚琴は打奏という性格上、擦奏や撥奏に比べて入りやすい楽器と思われる。それは独奏曲もあり、広東音楽ほかの合奏や語り物にも用いられているため、ジャンル上の拡がり大きいだけでなく、現在、二胡の伴奏楽器として最もポピュラーな存在となっているので、併せて導入すれば相乗効果も期待できる。その他の弦楽器としては、三弦、月琴などもあるが、主として声楽の伴奏楽器か合奏中の一楽器として扱われることが多い。

二胡以外の胡琴では、京胡は京劇をはじめ限られた

中国楽器の演奏を音楽学部または音楽専攻の学科系を擁する大学の授業科目にいかに関与すべきか

劇音楽、語り物の伴奏楽器であり、近年若干の独奏曲が書かれているものの、その本流はやはり伴奏にある。高胡や板胡については、現在では独奏曲があり、二胡の演奏家でも高胡や板胡を演奏する人が決して珍しくはないが^(註3)、本来は伴奏楽器であって、その演奏様式にはそれぞれ広東音楽特有の柔らかいポルタメントや、北方劇音楽独特の力強い装飾音といった地方的色彩が強く求められるものである。

笛子（横笛）やダブルリードの縦笛の唄、管子は合奏のリーダーとなることもあるが、上記の弦楽器のような無伴奏の独奏形式が確立されているとは言い難い。打楽器はそのさまざまな組み合わせによって、中国全土に鑼鼓楽と総称される合奏形式を成立させており、京劇の鑼鼓も重要なものの1つである。中国音楽のリズム感、音色感を知るのに格好のジャンルとして、導入が望まれるところだが、4-5人1チームによる合奏が基本であり、口唱歌を通じてのリズムパターンの教習を原則としている。現在では、西洋式リズム譜で記されたもの（譜例1）もあり、それらを活用しての擬似体験は可能だろうが、それではリーダー格の楽器（板鼓）奏者の手の動きや、奏し出されるリズムに即応して他の楽器（大鑼、小鑼、鏡鼓）が決められたリズムを共に叩き出すという本来の演奏形式を身につけることはできない。その習得には相当な時間を要し、周知のように京劇の上演と不可分の関係にあるだけに、導入には難しいものがある。したがって、上記のような現状では、当面は二胡や琵琶が中心になるのは、ある程度止むをえないといえるだろう。

II 広島大学教育学部の授業科目における二胡の導入の現状

冒頭で述べたとおり、本学教育学部（音楽）の開設科目（専門選択）、民族音楽学演習の前期では二胡の演奏を導入している。担当教官は筆者^(註4)で、受講の主対象は3年生、単位取得者数は平成12年度7名、平成13年度14名であった。時間数は週2時間×15回計30時間、教授方式は集団レッスンを基本としている。

使用楽器の二胡の調達については^(註5)、現在は日本の楽器店で二胡をはじめとする中国楽器を購入することができるので、教官研究費を活用して本演習では一丁3万円前後のもの（楽器のランクとしてはBクラス程度）を調達して、受講者に供した。

授業の大部分は演奏技術の教習に主眼をおいたが、導入および総括としてビデオ、CDを使用しながら二胡音楽の概要を講義した。一般では、中国胡弓＝二胡というイメージが強いことが予測されるので、胡琴の

種類を概観し、二胡はその1つに過ぎないという事実を確認することからはじめ、そして、その音楽は比較的新しいこと、すなわち、独奏楽の形成は1920年代であり、その当初から西洋的志向が強く、近年益々その傾向を強めていること^(註6)、またクラシックやポップスの世界へも進出している現状^(註7)を述べた。また、それには二胡の学習とガムランやシタールのそれとは些か事情が異なることを受講者に認識してもらうという意図もある。

教習曲については、二胡教則本として定評のある劉育和の(1)『劉天華二胡琵琶曲集』、張韶の(2)『二胡講座』、(3)『二胡広播教学講座』から一年目は(1)と(2)、二年目は(3)を主として使用し、適宜、楽曲を選び出して学習させた。それぞれの本の概要を簡潔に記すと次のようになる。

(1) 『劉天華二胡琵琶曲集』より二胡の部分

一、二胡について 二、二胡練習曲四七首 三、二胡独奏曲十首

(2) 『二胡講座』^(註8)

第一部分 緒論

一、二胡は弓奏楽器 二、二胡の構造 三、どのように二胡を使用するか 四、姿勢について 五、左手の楽器の持ち方 六、右手のボーイング 七、調弦

第二部分 技法

一、ボーイング 二、指法 三、如何に練習するか

第三部分 練習曲

第四部分 独奏曲

(3) 『二胡広播教学講座』

第一章～第十二章

二胡音楽の誕生から今日に至るまでの歴史、楽器の構造、基本奏法、調弦、ボーイングなど

練習曲

一一三、各種ポジションと技巧の練習

楽曲

十四、独奏曲12曲 十五、重奏曲9曲

現在、中国楽器の多くは数字譜を用いて教習されており、二胡もその例外ではない。数字譜とは簡単にいえば、1234567の各数字をドレミファソラシの階名に当てて楽曲を記す方法で、音価、リズムについては、休符を0とする以外、八分音符は一本線、十六分音符は二本線、付点の打ち方の原理は五線譜と同じなので、初学者にもスムーズに理解される。当然、音大生、教育学部音楽科の学生となれば全く問題はないが、必ずしもそれが演奏技術のスムーズな習得につながるというわけでもない。例えば、ドをd'の音高に合わせるため、固定ドの学生は却って違和感を抱く場面も見られた。いずれにせよ、後述するように楽譜は便宜的なものであって、教習がある程度進んだ時点で、楽譜の使用は本来的なものではなく、そこに書かれていない様々な装飾音がつけられる余地があることを示した。

そうした点のみならず、教習に際しては全般的に過去と現在の対比を織り込みながら展開するように留意した。というのは、数字譜の原理を単に機械的に覚え込ませるといふより、楽譜の使用によって、二胡の音楽が如何に統一的演奏様式の方へ進んでいるかを学習者に感じ取らせることに意味があると考えたからである。そして、それは楽器の形状、調弦、旋法の呼称などでも同様である。

調弦は完全5度が基本で、現在はd'、a'が一般的だが、著名な民間芸人の華彦鈞の演奏では、g、d'であったことを録音で確認することができる^(註9)ように、本来はまちまちであった。持弓法はヴィオラ・ダ・ガンバと似た持ち方(チェロなどとは正反対)であるので、ヴァイオリンやチェロの学習経験者は当初は馴染むのに時間がかかる場合もあるが、現在の二胡の弓は毛並みをヴァイオリンのそれのように整え、張力を強くすることで擦奏を比較的容易にしている。按弦については、現在は指先が基本であるが、古くはあるいは今も演奏曲によっては指腹を使用することもある。通常、二胡の初学者が学ぶ旋法はまずD調、次にG調で、D調のポジションは図1の通りである。D調とは主音がド(d')、ソ(a')のド旋法(ドレミソラ)、G調とは主音がソ(d')、ド(g')、レ(a')のソ旋法(ソラドレミ)で、その呼称はまさに西洋と中国の折衷であるが、呼称はともかく、中国音楽の旋法感覚を指を通して身体的に体験、会得することに意義があると考えられる。実際に教習した部分をその目的とともに主なものを抜粋して下記に記す。

『劉天華二胡琵琶曲集』より

D調第1ポジションの習得

練習一～二十二 二十五、二十七、二十八、三十、

三十一、三十四、三十六

D調第2ポジション練習

練習三十七～四十四

『二胡講座』の第三部分より

ドレミソラの5音階の習得

オロチョン族民謡「オロチョン族小歌」

オクターブ上のド、レの練習

海南島民間楽曲「黎族舞曲」

総合練習

安徽民謡「鳳陽花鼓」

装飾音と左手の小指の使用

陳振鐸作曲「田園春色」

『二胡広播教学講座』からは主に pp.115 - 130と pp.145 - 147の二箇所を選定した。そこには、前記の劉天華の練習曲も多く収録され、『二胡講座』から選定した楽曲も掲載されている。その他、特に二年目の演習においては、G調の教習のため、下記の楽曲も選定した。

「邀請舞曲」

聶耳「売報歌」

チベット民謡「チベット舞曲(一部)」

「満堂紅」

各種の装飾音練習

黄梅調「満工対唱」

Ⅲ 今後の課題と提言

今日、二胡は中国楽器の中で群を抜く知名度で、楽器購入希望や学習の需要などの点でも際だった存在となっているが、大学の授業への導入に際しては、そうした現象を踏まえつつも、単なるブームとかではなく、何故二胡かという一定の理由付けがなされて然るべきであろう。諸民族の音楽、楽器の教習における先駆的存在である東京芸術大学へのガムラン、シタール、カヤグムへの導入は、より伝統的なものの追究、吸収という導入当時(1960-70年代)の民族音楽学の視点が反映されたものと思われるが、文化変容という今日的な視点からいえば、それらも、もはや旧来の伝統という枠に必ずしもとらわれる必要はなからう。

もとより、筆者が二胡を導入した理由は、決してそうしたブームに迎合した訳ではない。それは、むしろ伝統音楽への橋渡しとして「伝統音楽への入り口」およびその「新しい状況の理解」を主眼としている。こと二胡に関しては、日本の特殊事情として日本民謡や演歌などの演奏に象徴されるように、二胡への日本人特有の思い入れ、恣意的嗜好が先行しているように思

える^(註10)。そのような現状では、要はその音楽の代表性について正確な認識をもつようにすること、すなわち、二胡の音楽はあくまでも新しいジャンルであるが、伝統音楽への入門として機能する可能性の意義を知ることが肝要であると考え。実際、演奏技術の習得においては、新しい側面が先行し、伝統的な側面は二の次になりがちだが、それについては一世代前の名人の演奏をビデオやVCD、CDを活用して鑑賞することでフォローすることもできる。例えば、二胡の古典的名曲とされる「二泉映月」でさえも、今日ではすべての演奏家が本来の演奏スタイルを伝えているとは限らない。特に若い世代の演奏家から習う場合、それをそのまま鵜呑みせず、本来の演奏スタイルとはどのようなものであったか、検証しておくことが望まれる。ましてや、二胡の専門家ではない人の演奏を模範とすることなどは論外で、そのことは二胡の名演奏家の関恵芬と日本でよく利用されると思われる『世界民族音楽大系』に収録されている張曉輝の演奏（揚琴伴奏付き）とを聞き比べればまさに一目瞭然であろう^(註11)。

もちろん、仮に中国楽器（特に二胡について）の大学の授業への導入が実現しても、その成果は運用如何によって左右されるであろうし、そして、それには授業コンセプトや教師の選定も絡んでくると思われるので、以下、それらについて私見を述べる。

どの地域の音楽を導入するにしても「体験の重要性」を基礎に、その独特の音楽様式、音楽語法の教習をメインとすることに異論を差し挟む余地はないだろう。中国音楽の場合でも、上述のような音階、リズム（二胡ではそれほど顕著な特徴はないが）、表現法（装飾音など）などの特徴に触れることが求められるはずである。短期間に多くは望めないものの、二胡の学習を通じて、中国音楽における旋法の考え方的一端に触れることはできるし、胡琴類の楽器の特性であるポルタメント、装飾音の即興性など中国音楽独特の演奏スタイルの一端に触れるだけでも意義深いものがあると考え。

演奏法では最初は持弓法に違和感を抱くだろうが、胡琴の基本的奏法はほぼ共通であるから、二胡を学習すれば、他の胡琴を学ぶときに一定のメリットがあるものと考えられる。いろいろな胡琴に挑戦することで、中国音楽の地域様式の広がりにも触れることができるだけでなく、さらに、これによって他のアジアの胡琴類（馬頭琴、ヘーグム、ルバープなど）へと興味の道が開かれることも期待できるわけである。

西洋音楽に慣れ親しんだ者にとって、確かに数字譜は入りやすく、取り組み方によっては固定ドに慣れた者が移動ドの世界を体験することにもなるだろう。し

かし、二胡だけでなく、多くの中国音楽においてはもと、楽譜などはあまり意味をもっていなかったことを忘れてはならない。音階練習、練習曲、ボーイングの規範化などといったこと自体、明らかに西洋の影響によるもので、そのような西洋的システムによらずに伝承されている伝統音楽が中国にはまだ多数存在すること、その意味で二胡の音楽がいかに関与志向であるかを学習者は知らねばならない。むしろそうしたことを学習することによって、中国音楽の西洋化の現状や問題点を把握することが大切なのである。

演奏技術の面では半年で2-3種の旋法と第2ポジションまで習得できれば上々であるが、さらに欲を言えば転旋法を含む曲の学習もできれば理想である。それに、できるだけ多くの種類の装飾音（図2）、そしてそれらの付け方の感覚が身につけば申し分ないのだが、短期間では限界があろう。また、それに関連して、中国音楽におけるヘテロフォニーというより、ガムラン以外のアジア音楽の合奏様式を知るという意味で、二胡と他の中国楽器との合奏の妙味も味わえるようにすることも、将来の目標として設定されるべきものと考え。

教則本や教材^(註12)については、独奏楽そのものの習得のほかに、民謡から劇音楽、器楽合奏までの多様な音楽ジャンルへ目を開くという意味では、本演習で使用した張韶の教則本は有効^(註13)であったと考える。現在、多数の二胡教則本が出版されているが、どれを選定するにしても、伝統音楽の楽曲の収録状況など、何らかの選定基準を設けることが必要であるのは言うまでもなからう。

教師に関しては、履修期間の限られた大学の授業、特に（民族）音楽学関連の授業として楽器演奏が導入される場合、当該の楽器の演奏技術そのものを極めるというより、それを通して、その音楽文化をより深く理解し、より多くの音楽ジャンルへの接触を目指すという意味合いが重視されるだろうから、そうした目的に見合う人選が望ましい。その場合、必ずしもいわゆる著名な演奏家である必要はなく、ガムランの場合のように、民族音楽研究者であると同時に、一定水準の演奏能力をもった人材、あるいは民族音楽、西洋音楽を含めた広い視点から当該の音楽（二胡など）をとらえ、教習できるような演奏家も視野に入れても良いのではないか。その場合、古琴のところで少々述べたように、単なる愛好家ではなく、音楽学的知識も十分に備えていることが重要であって、俄音楽学研究者ともし演奏家の登用は論外というべきだろう。

そして、そのカリキュラムとしての位置づけについては、胡琴に限らず、多くの諸民族の楽器や音楽と同

様に、中高との一貫教育の展望を考える時期が来ているのではないか。例えば、中高で二胡を、それ以外の胡琴を大学で学ぶ流れを作る、音大でいえば他学科と、総合大学では他学部とで単位交換などの協力体制の確立も望まれるところである。それから、民間の教師、教室、愛好者団体との連携も、生涯活動教育の視点から言って検討に値するだろうが^(註14)、大学での授業はあくまでもその独自性を失ってはならず、中国音楽でいえば、中国文学者や一般の人々による中国音楽の同好会と同質のものでは意味がないのである。

広島でも二胡学習希望の問い合わせがあるなどの状況に対しては、本学の公開講座で二胡の講習を開催するなどの何らかの対応を考えてはどうかとも思うが、あくまでもブームに流された形での導入は自重すべきだろう。単にアメリカの大学で琵琶が教授されているからといって、それに追従すれば良いというものではないのと同様に、日本民謡、西洋古典音楽、ポップスの演奏に偏重した形は、二胡の望ましい受容とはいえないのである。本学の場合、むしろ、広島との姉妹都市の関係を生かして、中国四川省の伝統音楽を授業に導入してはどうかと考える。中国音楽に限らず、諸民族の音楽の大学への導入に際しては、一律の内容である必要はないはずである。その意味では、21世紀を迎えた今日、ガムラン、シタール、カヤグム、二胡、琵琶に限らず、導入対象の多様化を検討すべき時期が来ているように思われる。楽器は博物館の中で展示するだけでは惜しい。かといって、安直な教習によって、その音楽の本質が歪められて浸透するような事態は回避されねばならないはずである。

譜例1 鑼鼓の代表的リズムパターンの唱歌の紹介
 (『京劇打撃楽彙編』より「沖頭」というリズムパターン)
 その口唱歌：バドゥー、ツァンチー、ツァンチー (繰り返し)、ツァンチー、ツァンチー、ツァン

【譜例1】

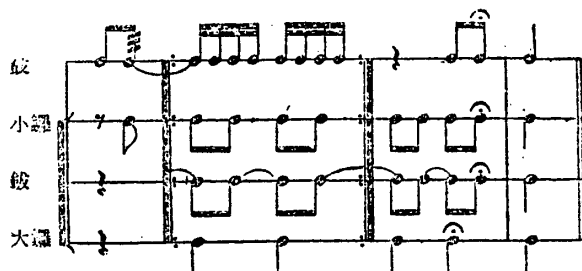
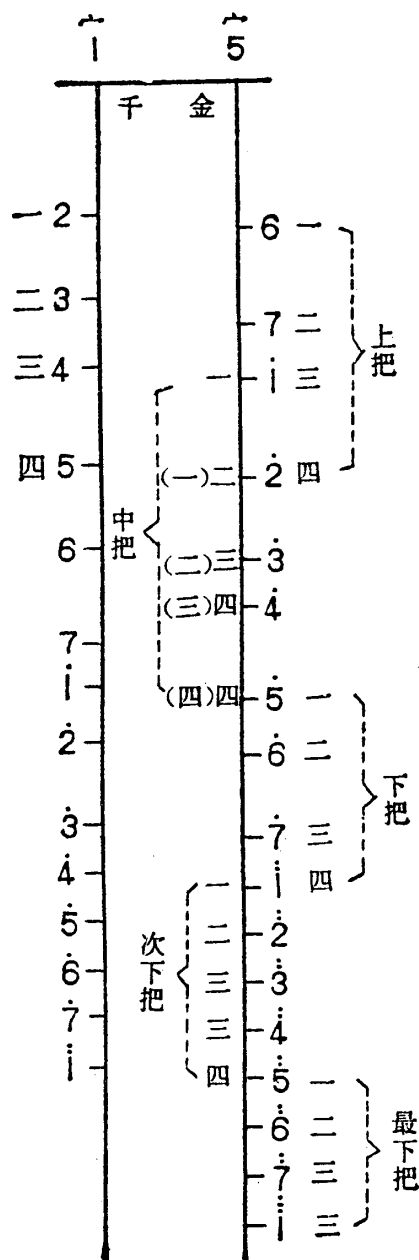


図1 二胡の演奏ポジション
 (張韶『二胡広播教学講座』よりD調)

1=D(15弦)



中国楽器の演奏を音楽学部または音楽専攻の学科系を擁する大学の授業科目にいかに関与すべきか

図2 装飾音の種類（『二胡講座』より抜粋）

| 中国語 | 日本語（できるだけ技法の内容に即して訳した） |
|------------|-----------------------------|
| 1. 小滑音 | 1. 小ポルタメント（音程が2度または3度） |
| 2. 大滑音 | 2. 大ポルタメント（音程が3度以上） |
| 3. 連線滑音 | 3. 始まりと終わりの音高を明確に指定するポルタメント |
| 4. 半音滑音 | 4. 半音のポルタメント |
| 5. 回転滑音 | 5. 元の音高に戻るポルタメント（上昇および下降） |
| 6. 後滑音 | 6. 旋律音の後に付くポルタメント |
| 7. 墊指滑音 | 7. 隣接する2本の指を使用するポルタメント |
| 8. 顫指低回転滑音 | 8. 7. の下降によるポルタメント |
| 9. 顫音滑音 | 9. トリルを伴うポルタメント |
| 10. 顫指滑音 | 10. 9. にヴィブラートをかけたポルタメント |
| 11. 顫弓滑音 | 11. トレモロを伴ったポルタメント |
| 12. 帶指滑音 | 12. ポジションの移動時のポルタメント |
| 13. 圧弦滑音 | 13. 弦を押して行うポルタメント |

※ここでは、二胡の装飾音の中でとりわけ重要であるポルタメントを示したが、その他、前打音、後打音、トリル、ハーモニクスなど多様な装飾音が使用される。

【参考文献】

- 劉育和『劉天華二胡琵琶曲集』香港信成書局、1976
張韶『二胡講座』香港信成書局、1973
張韶『二胡廣播教學講座』上海音樂出版社、1989
中國戲曲研究院編『京劇打擊樂彙編』人民音樂出版社、1958、1991

【参考録音・映像資料】

[CD]

- 許可『胡弓の響き、クラシックの調べ』BVCF-1502
BMG ビクター株式会社、1993
趙国良『趙国良の世界、胡弓とシンフォニック・キーボードが奏でる日本民謡集』CRCI-20111 日本クラウン株式会社、1993
趙国良『趙国良の世界、コンドルは飛んで行く』CRCI-20110 日本クラウン株式会社、1995
『華彦鈞（阿炳）紀念專集』RC-961002-2C 龍音製作有限公司 1996
劉明源「弓弦樂の神手」VIGG-60024 ビクターエンタティメント株式会社、1997

[VCD]

- 『中國民族器樂7』吉林省教育音像製品出版社 出版年代不明

[ビデオ]

- 藤井知昭監修、櫻井哲男・大森康宏編集『音と映像による世界民族音樂大系』日本ビクター・平凡社、1988
『ピアノ協奏曲黄河・二胡協奏曲梁山伯と祝英台』BVVX-131、BGM ビクター株式会社、1993

【脚注】

- 注1 本稿では、音楽学部または音楽専攻の学科系を擁する大学という意味で以下、単に大学と略称する。

注2 岸邊成雄『江戸時代の琴士物語』有隣堂、2000に詳細に述べられている。

注3 劉明源のCD「弓弦樂の神手」VIGG-60024

注4 筆者は香港在住時、香港中樂團の黃建偉氏のもとで二胡、板胡、高胡を学習した。

注5 ワシントン条約の關係で、中国、香港などで個人がお土産品として購入したものをそのまま持ち帰ることができない。

注6 『ピアノ協奏曲黄河・二胡協奏曲梁山伯と祝英台』BVVX-131、BGM ビクター株式会社、1993

注7 CDでは許可『胡弓の響き、クラシックの調べ』BVCF-1502、趙国良『趙国良の世界、コンドルは飛んで行く』CRCI-20110など

注8 同書の出版経緯に関しては、『二胡廣播教學講座』pp.2の「編者のことば」で述べられているので、それを要約すると次のようになる。同書の初版は『二胡廣播講座』として1959年に出版されたもので、その改訂版が1964年に『二胡講座』として出版された。さらにそれは香港で著者名を張音召として出版され、好評を博した。そして、1979年に上海文芸出版社より新たな改訂版作成の申し出があり、出版されたのが『二胡廣播教學講座』である。

注9 『華彦鈞（阿炳）紀念專集』RC-961002-2C

注10 趙国良『趙国良の世界、胡弓とシンフォニック・キーボードが奏でる日本民謡集』CRCI-20111 日本クラウン株式会社、1993など

注11 本稿の録音・映像資料を参照

注12 二胡の入門ビデオや樂器の付録として日本語によるもの出てきてるようだが、現時点で筆者はそれらを未入手なため、その検討は別の機会に譲りたい。

注13 同書には板胡、高胡、京劇などの樂曲も収録されており、様々な音楽ジャンルの演奏スタイル練習する部分が設けられている。

注14 ガムランでは「こどもの城」、「音工場」などが良い前例。